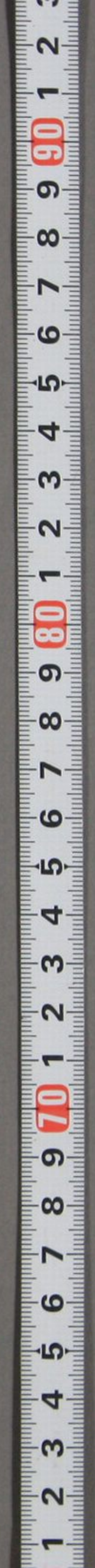
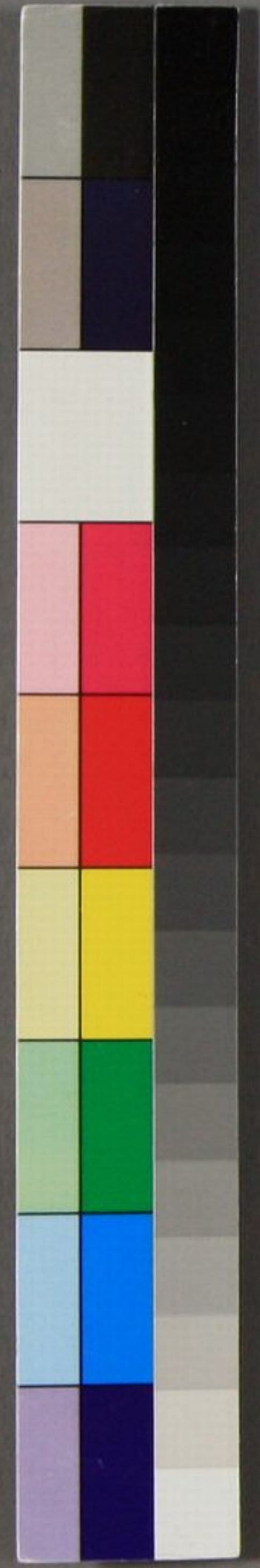


野槌

上之三

野槌





有客謂曰凡稱物語草子以行
 于世者多出自婦人女子之手故
 有喔咿嚶嗁之語無教誨訓誡
 之法唯見冶容粉粧之態未聞
 丈夫雄豪之風且或煩諸繁冗
 失諸嘈雜或流於鄙俗淫於震
 誕往之皆然獨有紀氏古今倭歌



卜部系圖

○大織冠タテ鑰足カギ意美磨イミ清磨セイ諸魚モロ智治磨チヂ

良磨ラウ豐宗トヨ好真コウ兼延カニ兼忠カニ兼親カニ

兼政カニ兼俊カニ兼康カニ兼貞カニ兼茂カニ

右京大夫
兼名カニ兼頭カニ

慈遍ニ
大僧正
右朝詔
民部太輔
從五位上

兼直カニ兼好カニ兼豐カニ兼熙カニ兼敦カニ

兼藤カニ兼益カニ兼夏カニ兼豐カニ兼熙カニ兼敦カニ

兼富カニ兼名カニ兼俱カニ兼致カニ兼滿カニ兼右カニ

兼見カニ

風雅集十七巻のうづらて、本曾路と云
にを色づくこと 兼好法師

わらひころもあはれあきあぬ浅のみ
うめやじしよ神の色は

新千載集十六巻。建武二年。内裏千載
歌。題を詠りて後そともりけること

春植物の心はこゝろ

久らふれ雪井乃らにけける目も
ひらにけける空月はららるるれ

周十八雜身下

いあくもたうま世まあらちよるら
思ひあけらるるは

周十九 兼好法師が母が海より

うらめづい法事の目づけ物そ

庵て下はうりうり

前大納言為室

別あ秋をかめめくめらちまて

時一もあはまうまうん

也

あらあ秋うらめづい

あはまうまうまうん

新拾遺集六冬部

あー鴨のはらふ翅ふるまかあうめい

うは毛け霜やまげふるま

周九 霸孫部

掬らうらうらうらうら

山はくうは月をうらうん

周十一 忍久恋

思ふ又うらうらうら

うらめづい人うらうら

新後拾遺集八 炭竈を

すみろ海に年々わらわらしむるにや
くちや松のつらみたるらん

圓中九 離別を

津波のよきよれしころの髪を
たのむくしるく山風を

圓十六 雜を

はの世をなげらぬはよき
もけうはよきこそいふ

新續古今集六百

心枕の跡をたのむ茶の葉を
もさなまのころの髪を

圓十一 戀を

みさしほのころはよき
きくぬき人よきこそいふ

圓十二 玉津島社

れ申は祈を
いふよきん神はよき

る面を
かきしるくはよき

圓十三 無敵

新後拾遺集

こぬ人をさばちういぬふーつふき
つくよなみこしはちうさるいん

同中十五 絶恋を

うまひしきこねさうさつさうさつ
うつねたのびんさるちうさる

同中十七 雑言

乃らまゝいぬたしそれ森のりみら
教うひらうかいがーちきち

心二十六首と右れめ氏の集りか
きりち

兼好法師自讃歌二首

うしふころ名のもれちうさるいん
あともいものらうさるちうさる
伴うさるかへきまそもも母の平
いぬさるいん人なるとも

又兼好があまわとて或人たうさる

世中をわさるちうさるいん

つ波の鳴戸と波風もね

高野山金剛三昧院の兼好自業

れ短冊五枚あり。是、或人夢り、南

五巻一

無釋迦佛^カ全身舍利^セと云事^セを人
て若^シの^カま^カよ^カほ^カし^カう^カ時^カに^カ兼^カ好^カし^カよ
め^カほ^カみ^カち^カと^カ直^カ義^カ朝^カ臣^カそ^カ跋^カを^カ出
つ^カ真^カ歌^カ云

は^カく^カた^カん^カい^カん^カも^カ初^カ善^カ法^カ部^カ云
た^カし^カよ^カろ^カこ^カゆ^カら^カら^カう^カぬ^カん
香^カ白^カいた^カく^カなり^カる^カ色^カに^カあ^カつ^カれて
み^カの^カう^カれ^カた^カや^カま^カほ^カは^カく^カら^カま^カ
理^カ即^カち^カ究^カ竟^カい^カは^カ佛^カい^カう
ひ^カと^カら^カう^カれ^カ玉^カこ^カみ^カ移^カる^カ免

葉^カの^カ戸^カよ^カあ^カら^カう^カと^カ毎^カ末^カ月^カの^カ影
さ^カふ^カ人^カも^カあ^カら^カう^カす^カ人^カも^カ如^カし
武^カ蔵^カ野^カや^カ雪^カい^カち^カは^カら^カう^カた^カよ^カに
ま^カよ^カい^カの^カい^カて^カあ^カら^カう^カた^カは^カい^カり

つまじくくさるる吉田兼好法師の作也
兼好は後醍醐天皇の御時の人あり
高武蔵守師直の御時より師直
の代て塩治判官の妻の御時より
を去てやうけり。や。徹書記の物語
に。或云兼好は後宇多院の侍
なり。帝崩してのちの御時をさうて
遁せし。此時。浄弁。慶運。頼阿。兼好
の四人をせし。四天王と號し。と云ふあり。
け。草紙をばれくくさるる名はくくさる

事ハ發端のしるしに依りて号し
 まり。くわんらん草紙の義ハ
 又清女草紙の草葉の義ハ
 このふしやわ

け草紙のしるしに依りて枕草紙
 物語の辨をうつし。善好ハ天台の
 教を學びて又花老のるものうら
 かなと云ふ。世俗をいふはゆり。
 生死を常を歎。時序を感じ。
 風景をうら。男女の情をいひて

あらばをのべき。ゆら。和緒
 の文章小に於て殊よし。と
 るのあわ

惟然 用向ナキ
ボレヤトシテモナリ

けとくならるゝあゝ

しひひん 心明鏡方境ウツリ来也 事 取リテ

こほり 心ナカレクコトナク 事 取リテ

ま 星途二部ノ序也 事 取リテ

是 星途二部ノ序也 事 取リテ

物 物ノ真字本 事 取リテ

わ 閑寂の心 事 取リテ

目 終日 事 取リテ

に 山 事 取リテ

乃 雷 事 取リテ

取リテ

取リテ

取リテ

取リテ

取リテ

取リテ

取リテ

取リテ

取リテ

羨夏日 日くらり かなるし かなるし かなるし

と ぬく 物さう ぬく ぬく

なま ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく

雅集 ありあり

○ かなるし 由来 なる事あり

○ うこ けうと ながく 神 月 風 雲

かなるし ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく

かなるし ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく

いざや せふ せふ せふ せふ せふ せふ

事 こと こと こと こと こと こと

あし 竹の 園 生 の 末 葉 も ぞ 人 間 中

あし 竹の 園 生 の 末 葉 も ぞ 人 間 中

あし 竹の 園 生 の 末 葉 も ぞ 人 間 中

あし 竹の 園 生 の 末 葉 も ぞ 人 間 中

あし 竹の 園 生 の 末 葉 も ぞ 人 間 中

あし 竹の 園 生 の 末 葉 も ぞ 人 間 中

あし 竹の 園 生 の 末 葉 も ぞ 人 間 中

あし 竹の 園 生 の 末 葉 も ぞ 人 間 中

あし 竹の 園 生 の 末 葉 も ぞ 人 間 中

いかにぬめりあはる人よき本「極善の如く世に離
のぞくはたむく「丑ヤウナキサマシム」

まがむらひのしるし「サアルト無好モ同心ナリ」

みきちのしるし「増」

賢じのしるし「名」

滞れはるし「永」

ぬるのしるし「却」

ありのしるし「行跡」

あんのしるし「アリタキ」

はまのしるし「夢」

うあひのしるし「あ」

人れらのしるし「本性」

口たのしるし「人」

はまのしるし「カ」

まのしるし「今」

人れらのしるし「我」

まのしるし「向」

はまのしるし「板」

有職のしるし「其外」

有職のしるし「有」

しつづきもいふがごとししつづきもいふがごとし
五蓮華十八葉
五蓮華十八葉
五蓮華十八葉

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし
五蓮華十八葉
五蓮華十八葉
五蓮華十八葉

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

五蓮華十八葉

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

いづれもいふがごとししつづきもいふがごとし

竹園 親王御事也
梁孝王親王の
百里二竹ヲ好シ植
ハリ是ヲ竹園トシテ
親王ノ事ナリ

あり。史記世家よ。梁孝王ハ漢文帝ノ子なり

影帝ノ兄也。方三百餘里。苑を築つし

官室を作して。複道を作りて。平臺についで

幸。三十餘里あり。西京雜記よ。孝王は苑あり

落接。石榭。龍岫。鴈池。鶴洲。めづりし。果

樹あり。多し。鳥獸多くあり。餘ぬ。此宮觀相

連も。時此人。名づけて。梁孝王の竹園と

いふ。又。脩竹苑とも名づく。朗詠よ。此花是非

人間種。再養平臺。一序霞。此花是非人間種

瓊樹。枝頭第二花。である。も。此花是非人間種

人間種。再養平臺。一序霞。此花是非人間種

瓊樹。枝頭第二花。である。も。此花是非人間種

いよるわ 杜子義哀王孫詩高帝子孫尽
隆準龍種自_ラ常_ト人殊_ク

やじとるに 源氏桐壺小やんとれ

あつとるに 花も餘情あり

やんとるに さいとあつと膳れ志

るはよ 無止とあつ

一人 授政関白をらと 職原鈔よ

執柄必蒙一座之宣旨故稱一人

乃とるわハ 時を収め義あわ

たぐ人 毛詩小匪直也人

あつた人とは 授関外の人をらと

舎人をもとらつる 毛詩の舎人の義也

是を本附れ其もとつるゆゑををわ

てはつとるわ 小徳もはつとるわ及ぶ

家もあわ

ちつとるわ ちつとるわ 義あわ

放埒とあわ

古今にもはつとるわ ちつとるわ

けつとるわ ちつとるわ

放埒とあわ

いさかひいまうにけりて 可いあひて
威勢あるわ。まうの極の字也。わらう
と訂れ字也

増賀ひーと 和別多武奉れ僧也

撰集鈔一云。しー増賀聖人といふ人

いあやわらういけふわけりうらな

わくて天台山の根本中堂。千夜こ

らこて。いれを新治ひきれも。行實れんわ

アようあやわらん或はすー。日一う伊勢

大神宮ふまうぞう。新撰志治ひらりり。

夢にんし。治あやう道心をた。うんとた

く。我れをまもる。あひうと。示現をう

あや治ひらうと。うらあうて。あや。あや。あや

をまもる。あやう。あやう。あやう。あやう。あやう

治うらうら。あやう。あやう。あやう。あやう。あやう

くれて。あやう。あやう。あやう。あやう。あやう

あやう。あやう。あやう。あやう。あやう。あやう

あやう。あやう。あやう。あやう。あやう。あやう

あやう。あやう。あやう。あやう。あやう。あやう

あやう。あやう。あやう。あやう。あやう。あやう

五卷一頁

大夫橋恒平之子也。十歲。父母送唐香山
 与慈惠。性聰穎。探復繁。学綜頭。密尤邃。
 止觀。而惡利名。絶文謁。安和上皇。勅為侍奉。係
 狂放。汚而逃去。太皇太后。敬事為師。而
 延宮中。便於采女中。出鹿後。又四禿去。
 慈惠任僧正。入宮賀謝。翼後甚盛。賀
 幣。乾魚為劍。乘瘦牝牛。交先驅之
 列。諸徒叱而去之。賀后。色曰。僧正之
 前驅。去我誰乎。聽者笑而伏。應和云
 年。如覺法布。勸上讀太。因先居焉。長保
 五年六月九日。滅年八十七

を。そ。人。其。名。を。り。し。つ。る。も。何。ん。の
 為。ん。と。あ。ま。わ。佛。光。れ。極。所。の。形。も。ろ。く
 も。も。る。況。名。利。を。や。我。が。一。力。と。し。た
 して。一。佛。と。も。わ。て。一。佛。と。く。河。沙。也
 也。界。小。あ。ま。り。ゆ。く。一。力。と。く。千。手。千。眼
 を。具。と。双。手。と。自。不。も。の。の。於。九。百
 九。十。八。乃。手。目。あ。る。小。あ。ま。り。ゆ。く。也。叔。山。無
 趾。は。足。と。し。た。一。佛。と。も。わ。て。一。佛。と。く。河。沙。也
 也。界。小。あ。ま。り。ゆ。く。一。力。と。く。千。手。千。眼
 を。具。と。双。手。と。自。不。も。の。の。於。九。百

かどもゆく分^ジ散^{サン}とつ事あるゆへに、
 乃らあつじ者ともなほのしんじつ^シに
 侍べし。いんぞり名をもとめ、利を貪^ギむ
 や増^ツ賀^ガ上人の名聞^{ミコト}ぐる。あつてあつて
 かゝては、いんぞりありて、風^フ顛^{テン}漢^{カン}となつて
 更にもろへ入^イ事^ジ也。世^セ前^{ゼン}に法師^{ホウシ}の金^{キン}
 襪^ワを肩^カよりけて、塵^チ埃^{アイ}のよきとつ物
 付^ツ類^{レイ}小^コ洲^{シュ}をひらぐらんや

ひらうち一向とあつじつとつて、
 ハ^ハク^クモ^モノ^ノセ^セツ^ツに、いんぞりありて、
 ちのち伊勢^{イセ}物^{モノ}終^ハみ、いんぞりのしんじつ
 ありし、いんぞりありて、いんぞりありて、
 ありし、いんぞりありて、いんぞりありて、

人^{ヒト}のつらありて、あつて、
 あつて、あつて、あつて、
 めぞ、あつて、あつて、あつて、
 あつて、あつて、あつて、あつて、

本^ホ居^キ宣^{ノブ}長^{チカ}のつらありて、
 あつて、あつて、あつて、あつて、
 源^{ゲン}氏^シ常^{ジョウ}本^{ホン}に、あつて、あつて、
 あつて、あつて、あつて、あつて、

けしげく ときあわ

これらごとく 日本紀二十一年の事 大支の事

有差降

ふげごと なが影のぬ意也

又れもら 後おの宮れたるわあ

あんとあつと。人をはけてうへ

ゆるうく せいをれさつともあわ

あわ。うら川物よんたておつてを

よへをさるるをいふ。林の中

しくりしむる。おのこにあひ

公事 かねやげとも。後わ。林の中

以事をとる事。あつて

人れ鏡 唐書魏徵薨太宗臨朝嘆曰以

銅為鏡可正衣冠。若為鏡可正心。以

為鏡。のり得失。朕常保此三鏡。内防已

過。今魏徵逝一鏡亡矣

ふかむつ。これ。び。り。り

東坡文集云。真生行。生。真如。行

如行。草。少。有。能。之。能。而。能。

去也。河海。真乃字。人れ冠

予コト志シ神カミ也ナリ。字ナリありし神カミ也ナリ。草クサ一ヒト字ナリ人ヒトれニ志シ神カミありナリ。

げニ酒サケをノしスをス大オホ戸トといフひノりシはシれ

去クをス少コ戸トといフ事コト。白シロ氏シ文ブキ集シユよクんニあリわ。

日ヒ本ホよクんニあリ。下シタ戸トといフ酒サケ安ヤス拖ヒキ曲マカ也ナリ。

又マタよクんニあリ。下シタ戸トといフ酒サケ安ヤス拖ヒキ曲マカ也ナリ。

けレこノれニあリ。下シタ戸トといフ酒サケ安ヤス拖ヒキ曲マカ也ナリ。

はシれニあリ。下シタ戸トといフ酒サケ安ヤス拖ヒキ曲マカ也ナリ。

又マタよクんニあリ。下シタ戸トといフ酒サケ安ヤス拖ヒキ曲マカ也ナリ。

はシれニあリ。下シタ戸トといフ酒サケ安ヤス拖ヒキ曲マカ也ナリ。

又マタよクんニあリ。下シタ戸トといフ酒サケ安ヤス拖ヒキ曲マカ也ナリ。

はシれニあリ。下シタ戸トといフ酒サケ安ヤス拖ヒキ曲マカ也ナリ。

又マタよクんニあリ。下シタ戸トといフ酒サケ安ヤス拖ヒキ曲マカ也ナリ。

はシれニあリ。下シタ戸トといフ酒サケ安ヤス拖ヒキ曲マカ也ナリ。

又マタよクんニあリ。下シタ戸トといフ酒サケ安ヤス拖ヒキ曲マカ也ナリ。

はシれニあリ。下シタ戸トといフ酒サケ安ヤス拖ヒキ曲マカ也ナリ。

又マタよクんニあリ。下シタ戸トといフ酒サケ安ヤス拖ヒキ曲マカ也ナリ。

はシれニあリ。下シタ戸トといフ酒サケ安ヤス拖ヒキ曲マカ也ナリ。

又マタよクんニあリ。下シタ戸トといフ酒サケ安ヤス拖ヒキ曲マカ也ナリ。

はシれニあリ。下シタ戸トといフ酒サケ安ヤス拖ヒキ曲マカ也ナリ。

之樂不聽。宮垣屋室不望。堊楹楹不剗。
茅茨偏庭不剪。

群書治要引六韜曰茅茨之蓋不剪。

きくくく 清れ字也 從麗の義ありわ

こころをい 一取狭ありわ

おひとくくく おひひくくくくありわ

くくくくくくくくありわ

九條殿の遺戒 一巻あり右丞相師

輔公ありわ 須徳院ほきぬはるこれ白室子也

禁秘鈔一卷あり。禁中清鈔とも名て

おひやげのちあり物。帝をへちあり物也

公の字をたはひやもも 後あり。遊仙窟

あり。天事とちておひやげとも 後あり。

此後人の名とくハおれもをつがや

一 おひやげをさすくめずくくくへの賢者

をさすくくくく國を夏へ民をくくくくて

用を節せくくくくくくくくくくく

殊勝れ事ありわ。もろありれ聖王ハ

にたよくくくく善相公の意見封事を

凡ゆるに我朝神明れあまつし
はより傳へ給ひし者より國富民
そりあつて風俗すすめず。そり
ろくろごらあろそりて一國の政た
らざりしがのこご。そりて君子國
らばくはるる虚名よあつて中古
たもろへ政まじりくあつてゆくよ。
佛法乃ほめて我朝よつてりる事。
欽明の御より盃觴して推古の
つたれり。そりてらんたりて。君

臣士民よつてはもて財産をばく
田園をとりて多くは寺塔を建
立して天
平年中は大寺を造りて大佛を
つて天下の工を費し。又諸國七
道にも國分寺を作ら。其費し
て正税十分の五を恒武法宇
及びて都を長岡より。又は京を
經營し大極殿豊樂院を造りし
は。百あり。つてはあつて。そり
て子孫の
第宅后妃女御の宮館人の目を

やうに俗よ所謂大内裏とも是なり。天
 下正統の費五分三よ及處なり。仁明
 天皇位よつう務給ひてよろ川紛奢を
 愛し器物をちりきざらみ錦綉を縫
 つらり給ふよ一りて農業をよめ給へ
 女功をそと給ふ。其上に酒色歌舞はあ
 うび古今よまれしほとされが府庫
 盡し給へく賦歛もとげりやきと下れ
 費二分の一なり。貞觀年中に應天門
 大極殿焼らるるを昭宣公の力を待て
 期年のるよ成風の功をたすもとい
 ども其費をたすにす。一分の半よるよ
 けらるるよとせし。十から一よあらず。
 國の衰弊たりて志は盡し。又思ふに
 一への明君は儉約をこもひ驕りやを
 海に清潔の衣蔬粉乃食はせれば
 よあらずや。今王化たるに風俗
 しらくして上中下よいふあがて衣服
 飲食の奢り都鄙乃こいふめあく
 日に行水のなまされてるる風俗

う。きく。く。其。う。を。P。さ。ん。欠。祝
 元。其。の。世。の。ら。ま。子。不。良。と。皆。し。く
 志。れ。は。く。一。も。ぬ。を。夏。の。う。み。も。晒
 有。の。あ。一。絶。き。ぬ。を。と。れ。ら。ぬ。も。一。
 あ。づ。一。の。あ。ま。を。ま。は。ら。ぬ。も。一。め
 あ。一。の。あ。ま。の。ま。は。ら。ぬ。も。一。め
 袴。中。史。を。れ。の。も。み。ぬ。白。さ。ら。ぬ。を
 る。き。み。一。白。さ。縮。を。う。の。け。ら。ぬ。を
 し。ら。ぬ。一。縮。を。ま。ら。ぬ。も。一。菟。禰。と
 ら。の。一。の。ま。は。ら。ぬ。も。一。め。は。ら。ぬ。も。一。

婢。妻。小。い。の。ま。ま。で。新。統。越。後。を。ま
 じ。た。ら。ぬ。神。を。一。入。再。入。の。お。も。ぬ。を
 千。段。万。巻。れ。破。よ。ら。く。ぞ。れ。外。の。本。考
 藤。あ。ま。ら。ぬ。も。一。め。は。ら。ぬ。も。一。
 周。世。世。一。と。盗。賊。た。ら。ぬ。も。一。獄。訟。の。ね
 か。ん。一。世。を。い。ぬ。も。一。め。は。ら。ぬ。も。一。
 を。し。ら。ぬ。の。お。も。ぬ。を。一。検。非。違。は
 よ。一。人。品。よ。ま。ら。ぬ。も。一。め。は。ら。ぬ。も。一。
 新。法。を。施。け。ら。ぬ。も。一。め。は。ら。ぬ。も。一。
 中。よ。ま。ら。ぬ。の。封。事。也。これ。を

あうこがけいおれお孝のうらろ其いふ
もどは親のいふおれお孝のうらろ其いふ
いふおれお孝のうらろ其いふ
をいふおれお孝のうらろ其いふ
とよのものいふおれお孝のうらろ其いふ
乃こつちよあれおれお孝のうらろ其いふ
人倫をみづらげおれお孝のうらろ其いふ
及まもるおれお孝のうらろ其いふ
孔子の関雎詩をいふおれお孝のうらろ其いふ
漢をいふおれお孝のうらろ其いふ
孝と福をいふおれお孝のうらろ其いふ
ゆにうらろ其いふおれお孝のうらろ其いふ
男をいふおれお孝のうらろ其いふ

眼ナキ身トナリ
テ見タキト執
ハレシ天ニサモ
ト作者同ナリ

顯基乃中納言 西宮九大臣 高明公

孫大納言俊賢卿の一男あり

顯基此事 詳は續世継よ二所あり

選集抄 昔中納言顯基と申人

ぞかちけるは冷泉院の河朝よは之

終ひて寵愛やめづらむとておぼ

れ人をこゝおんとして三女に位よ

らばち終つちけり。常は林下れがそ

をいふて世のづからんたを

志すりあめり。さうらふらふら

いふははれやうと終ひてうらうに常ら

かきなせ終ひぬ。中納言と申人

いふがうとあつて大京とまはらん

行ひとゆていふやうとあつておぼ

うたふみかいらひる言はあられ

て船の月と申人。使をさうと

づれの世一人と申人。あはれ

まきあふらと申人。あはれ

るさうと申人。あはれ

あはれと申人。あはれ

一

三

ハ

まゝしんまのの書障れらして一り
のれらめとわらして其事
まにものつら

配はの月つみれくてし事 配は
流累友遷れ人のあるはまわ

配は必しも配はあつて遠
島へもあつても配はあつて

貧賤おきつみ飢寒にくらん
君おはつてはうはうもあつて

配はあつてはあつてはあつて
かゝるものもあつてはあつて

日る物ばあつてはあつてはあつて
なまのあつてはあつてはあつて

世山の山人群あつてはあつて
秋に涙あつてはあつてはあつて

まにものつら
罪がくは配はの月をいふ

て常相相れ事あつてはあつて
常相西府に友近せり替て九月十三夜

詩曰昔被梁華簪組縛今為賦滴子
 兼囚月光似鏡多似鼎風氣如刀不破
 然隨刀隨聞皆慘慄此秋搔作我方
 秋この詩をよめ人海力乃然ありを
 比友欽夫作紀州弱浦菅神廟碑其
 男云都府樓之瓦親寺寺鐘生樹
 無聊之慘不可掩也蓋非素以心字而然
 耶非耶嘗時詠赤鳥心之有耶無耶
 彼一時以一時雜敘之不强之色也
 鳥不の落非其行の字也云へりそれ
 富きりし貧賤めも若秋少思難
 にもいふとらうて自得せむ云
 事かたしとまの字もむ世長相ハ
 我神れ鴻儒かろし君は下等へ民ハ
 高ふいんが不豫の色るらんや榮
 省れ花の時都を歩ひ蜀魄の聲
 に君をさうもへ峨眉山の月は秋をくれ
 しみ藍関の雪小馬をこめてらんを
 やほ海を催しとらわまうて湘羅の波
 長沙の風飛ありとやもんかうとやせ

卷一

三

良房謚忠仁公ト
昇清和天皇ノ外
祖父ナリ深慮ハ所
名スルニ任セテ致
深慮大臣ト申ス

良房ハ諱ハ良房
道ヲモテ彼後益
ヲ進チシ子孫アラ
セシトナラハ子孫ナケレ
ハ甚テ詭スル道ナ
断リトモモコトナリ

子とてふものありて 平母女子と

いふのたゞしてあり

前中書王ハ中務方意ノ親王トシテ

ゆも也詩文能書乃人也具平親王ハ

は中書王トシテあり

九条の大政大臣伊通云也。

花園大大臣有仁公也。は二条院孫

仁親王ハあり也

いづれハ事と とう爵ハ字也。

子孫をいふ 勳會ハ曾ハ重也。自曾祖也。

深殿乃也。大政大臣良房謚忠仁

公ト也。深殿の后ハ又清和天皇ハ

外祖父也

世継の氣ハ物次 一名大鏡 藤原為業

は名 寐念トシテ人 世継の物次を以テ

又述テ目トシテハ一系院トシテ十

五年 帝トシテ大長等トシテ事

トシテ事トシテ深殿の大長

ハトシテ事トシテ深殿の大長

ハトシテ事トシテ深殿の大長

聖徳太子 用明天皇は太子也。厩の
とくしくむまれば、孫ふたなり。厩の皇子
と。又とて、（イ）耳ももり也。

平氏聖徳太子傳啓曰。太子三回御後執
奠王曰。汝新四路朕意趣有二者。若
無大行道之想。二者我子孫為
日弁。又曰。子孫不續。豈云大父
孔子造教。之後嗣者。為不孝矣。吾為
如大聖弟子。家為孔子小賢弟子。云々。

此際子孫の事をしる事あり。とていふなり。
花子が多田男子則多田懼。こころ意なり。ト
うは道ハ人倫を離れし。と田女。始りて
父子あり。父子あれば。則君はあり。兄弟あ
り。朋友あり。世をたぐ。とて。あつる。あつる。あつる。
か。ん。事。を。祈。ひ。て。人。倫。の。名。を。能。く。
是。聖。人。の。い。は。れ。也。い。ん。が。人。を。多
獸。群。小。同。ぐ。ん。や。然。心。を。伯。夷。
叔。齊。顔。淵。子。孫。あ。り。事。を。ま。さ。ひ。ぬ。
る。心。を。不。孝。と。ま。げ。ば。夷。齊。顔。子。不
孝。の。ん。や。か。ど。い。ふ。人。あ。り。大。なる。

僻^{ヒカ}常^{トコ}あり。夷^イ齊^{サイ}顔^{ガン}子^シもあてす。物
 はあつとをのづつと玉^イもつとよの命^イ
 とと。彼^カ山林^{セキ}寂寞^{ガク}をみじきうづつと私^シ
 をあつとめ。子孫^シなくんとと。人^{ヒト}れん
 のあつとるんや。かれ佛^{ブツ}老^{ラウ}をよのみて。
 父子^{フシ}をよと。又^{マタ}婦^フをよめつとと。佛^{ブツ}
 老^{ラウ}もつと子孫^シなくんとと。比^ヒ夏^カ總^{ソウ}
 持^チ經^{キョウ}をんじつと。釋^{シヤク}迦^カの妻^{ツメ}ハ耶^ヤ輸^{シュ}多^タ
 羅^ラなり。其^シ子を羅^ラ睺^ホ羅^ラといひ。妻^{ツメ}を瞿^ク
 夷^イといひ。羅^ラ什^シ三^{サン}藏^{ザウ}は妻^{ツメ}子^シれ。小^コあり
 ごと老子^{ラウシ}れ。子を段^{ダン}干^{カン}宗^{ソウ}といひ。宗^{ソウ}が苗^{ミョウ}裔^イ
 假^カハ漢^{カン}文^{ブン}帝^{テイ}小^コはくんと。道^{ダウ}十^{ジウ}張^{チャウ}道^{ダウ}陵^{レイ}
 も又^{マタ}子孫^シなくんと。如此^{コウ}なれば佛^{ブツ}老^{ラウ}
 もいづんが人^{ヒト}倫^{リン}をよと。けせんや。され
 を学^{ガク}ぶ。老^{ラウ}れしうくんと。てかくありも
 てゆくあり。聖^{セイ}池^チ大^{ダイ}子^シと。くらうに
 人^{ヒト}あれ。も浮^フ屠^トに淫^{イン}溺^{ダク}し。終^{シュウ}ふゆ。
 母^ボの母^ボれ僧^{ソウ}徒^トも。れわが方^{カタ}人^{ヒト}あり。と
 依^イ託^{タク}して。それとを記^キせり。老^{ラウ}れ陵^{レイ}を
 終^{シュウ}ふ。と。終^{シュウ}ふ。をよ。れ事^ジあり。と。

て。細^{シヤウ}加^カハ大^{キヤウ}聖^{コウ}孔子^{コウシ}が小^{コウ}賢^{ケン}ありとて
 うわ祝^{イハヒ}とを子^シれ取^{トル}とてうよ、い、い、い、
 昌^{シヤウ}勅^{トク}が所^{イハヒ}謂^ヒ不^{タカ}惟^{タカ}舉^シ之^シ於^ニ口^ニ而^モ又^モ筆^ス
 之^{コト}於^ニ書^ニとてい、い、い、い、い、い、い、い、い、
 行^{ユク}とれども道^{ミチ}れ明^{アカ}らうる、い、い、い、い、い、
 げ、小^{コウ}ありとて、い、い、い、い、い、い、い、い、
 今^{イマ}乃^{ナラバ}法^{ホウ}よ、い、い、い、い、い、い、い、い、
 よ、い、い、大^{ダイ}乘^{セウ}れ法^{ホウ}。酒^{シュ}肆^シ。娼^{ヤウ}坊^{ポウ}。即^{ソク}道^{ダウ}場^{バウ}
 なりとい、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 女^メ色^{シキ}よ、耽^{タン}つとて、い、い、い、い、い、い、い、い、
 人^{ヒト}のト、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 雖^{イハトモ}尔^ニ方^ニ佛^{ブツ}法^{ホフ}根^{コン}本^{ポン}とて、い、い、い、い、い、
 一^{イツ}又^{モト}は、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 國^{クニ}君^{クニ}とて、肉^{ニク}寵^{チュウ}あり、士^シ庶^{シヨ}人^{ジン}は、妻^{セイ}毒^{ドク}
 を、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 母^ボ子^シ孫^{ソン}を、得^{ユク}とて、い、い、い、い、い、い、い、
 病^{ヤマト}を、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 人^{ヒト}れ、種^{シュ}族^{ゾク}とて、天^{テン}地^チ也^ヤ

世道正統一

四十一

煙上立五斗常
作久テラバカ
ミトトカメテソ
ニテヤク金
録心イマヨシ
世ヨリ哀シモ
知ラカラシ免
角世ハ其ハ
多キコワイ
ジケレトモ

(甲) 西の四斗
限りテ書ク
ル事好ハク
スルハ
幸ナク土
真陽之四斗
之ハ節節
盛ハ月滿社
五ハハ
言長ハ陸上

極ハハ陽
衰ト云ミ
人単ハ前
盛ハハ
老テラトハ
任ハテ
衰ハ
多ノハ
ト

て何れいふ人のらるるがくれの序に
こと軍にさぬれども志がらん
めあともうぶなれそ代ほおすだぬれが
ちをうらうらと人よ出あれん
事はおひひみの陽子孫を費して

あつて野 あつて野のそんれは
あつて野 あつて野のそんれは
あつて野 あつて野のそんれは
あつて野 あつて野のそんれは

あつて野 あつて野のそんれは
あつて野 あつて野のそんれは
あつて野 あつて野のそんれは
あつて野 あつて野のそんれは
あつて野 あつて野のそんれは
あつて野 あつて野のそんれは
あつて野 あつて野のそんれは
あつて野 あつて野のそんれは
あつて野 あつて野のそんれは
あつて野 あつて野のそんれは

林道下巻一

露れ林乃ん地をすれ

は指造

かさほろ袖乃んきさうきさるるの

かろくろるる露

王景
俊成

あにあゝ野の露も遍山れ烟とみ

はきくささゆり時ぬくさるるささ

くきんこめれ枕も染るるし

かげろふれゆきをまら 夕くれみめら

けろつるるるれありつるるるる

しとじれ 弄花ぬ 遊糸 蜉蝣 蜻蛉 野

馬 陽燄 ぞとれ字をあげろる。又若るるる

けろるるるるるるあり。林希逸 莊子

義野馬 遊糸也 水氣也 杜子義 所謂

落花遊絲 白日靜是也

蜉蝣 八朝小生して夕に死しる虫あり

陽燄は弘法乃十喻詩中よ 詠陽燄 喻あり

莊子翼云 野馬遊氣也 又云 天地間氣如野馬也

夏れ 蟬乃 去秋をくぬ 夏れをくぬ

平小るのひしとあり 古今のま字 帝

く々 春鶯をまらるるともふ 夏れをくぬ

本直上巻一

白氏文集第二。秦中吟。不致仕。七。不致仕。仕礼法有明文。乃貪深者斯。言必不貪。吝九十。案隨雙文。聯氏能。於露。會負。名利。夕。陽。愛。子孫。挂冠。願。翠。綬。縣。車。情。朱。轡。金。章。爵。不。勝。任。儀。入。君。門。誰。不。愛。留。者。誰。不。愛。君。固。一。年。高。須。請。老。在。遂。令。退。力。老。は。ゆ。く。と。老。は。ゆ。く。と。老。也。

古今に... 至り... 世に... 論語... 及

其老也。血氣既衰。戒之在得。又云。老而不死。是為賊。と云々。女又... 世に...

白氏文集第四新樂府古塚孤妓止老花好
 顏色好兒者十人八九迷假色迷入從若真
 色迷人應過世彼真世假俱迷入之
 衣裳イニウにニたれものニと 白氏文集丹書府志
 行後ニク為ガ君ガ董ガ衣ガ君ガ聞ガ東ガ飛ガ射ガ不ガ聲ガ
 香ニ為ニ君ニ盛ニ容ニ飾ニ天ニ看ニ金ニ和ニ平ニ無ニ顏ニ色ニ
 えりニぬニハニ雪ニ抄ニ小ニ袖ニるニぬニたりニ
 ろニゆニつニなりニとニまニりニ えニいニくニれニぬニ義ニ
 一

久米クメれレ仙人センニン 元亨ゲンキョウ紀書キショ十八ジッパチ久米クメ仙人センニン者シヤ和州ワシュ
 上郡カミノ人ヒト入イリ深山シムヤマ学マカ仙セン法ホウ食シヤク松マツ葉エフ服フク薜ヒツ荔リ一イツ且カ騰トウ空クウ飛ヒ
 過ワタリ故里コノムラ會カヒ婦メノ人ヒト以テ足ツキ踏フミ院イン衣イ其ノ睡ネ甚シ白シロ忽トク生ナリ滌ス心シン
 即ソレトキ時トキ遂ス落ク漸シテ喫ク烟エン火カ復タラシ塵チ裏リ裏ニ然シテ御ミ堂ドウ裏ニ契セキ不レ奉ル
 當トキ署シ其ノ名ナ皆シテ書カケ前ノ仙セン其ノ某ノ今イマ回ヘ卷マキ中ノ往キ猶モト有リ
 手テ澤ニ悉シテ然ル嘗テ於テ高タカ市チ郡ノ當ニ精シ舍ノ鑄ル艾ノ六ノ藥ノ師ノ
 金カネ像ゾウ并ニ菩ブツ薩ザツ像ゾウ所トコロ謂フ久ク米メ寺ジ也ナリ後ノチ又モト修メ仙セン凌リ
 空クウ飛ヒ去ル又モト有リ大オホ伴トナリ仙セン安アノ曇トモ仙セン二ニ人ヒト与シ久ク米メ相アヒ後ノチ先ニ

久米クメれレ仙人センニン 元亨ゲンキョウ紀書キショ十八ジッパチ久米クメ仙人センニン者シヤ和州ワシュ
 上郡カミノ人ヒト入イリ深山シムヤマ学マカ仙セン法ホウ食シヤク松マツ葉エフ服フク薜ヒツ荔リ一イツ且カ騰トウ空クウ飛ヒ
 過ワタリ故里コノムラ會カヒ婦メノ人ヒト以テ足ツキ踏フミ院イン衣イ其ノ睡ネ甚シ白シロ忽トク生ナリ滌ス心シン
 即ソレトキ時トキ遂ス落ク漸シテ喫ク烟エン火カ復タラシ塵チ裏リ裏ニ然シテ御ミ堂ドウ裏ニ契セキ不レ奉ル
 當トキ署シ其ノ名ナ皆シテ書カケ前ノ仙セン其ノ某ノ今イマ回ヘ卷マキ中ノ往キ猶モト有リ
 手テ澤ニ悉シテ然ル嘗テ於テ高タカ市チ郡ノ當ニ精シ舍ノ鑄ル艾ノ六ノ藥ノ師ノ
 金カネ像ゾウ并ニ菩ブツ薩ザツ像ゾウ所トコロ謂フ久ク米メ寺ジ也ナリ後ノチ又モト修メ仙セン凌リ
 空クウ飛ヒ去ル又モト有リ大オホ伴トナリ仙セン安アノ曇トモ仙セン二ニ人ヒト与シ久ク米メ相アヒ後ノチ先ニ

太平廣記四百四十三云江陵松滋枝ハシ射鹿シカ者率以淘向鳥脛骨為管以廉心上脂膜グテ作シテ鹿聲有木號小號コシカ如之異或作鹿鹿シカ則麋鹿畢集蓋為牝鹿メシカ所誘人得ト殺ス夫而注之

山獺と云獸あり。その肉補益れ切あり。海狗瑣陽肉シラ落ロク蓉ヨウをいりてシし。

まそ山ヤマふりり山獺のありあそシら。

女メの下のありてシとシ山獺シカ女メ氣キをシそシ女メのシ山

獺シカも木をシてシてシあシ其木

らシ地チのシ獺師シカをシい

らシ事コトがシ網目カドメ小コくシ鹿

女メはシ役シのシをシとシおシら

みシらシ自シ教シとシかシてシし

朱文公自警言の詩も十年浮海一身輕シ対梨渦却有情世上シ意シ如シ人シ欲シ除シ幾シ人シ到此シ認シ平生シとシ云シらシげシ福シのシらシまシれシ胡シ澹シ菴シ忠肝義膽シありシ々シ秦シ檜シのシ國シ政シをシあシや

十一年を死してゆりて還りし時湘
 潭とて酒をのじ秋の情と云つら女を顧
 眄して梨頬生激瀉と云つ事朱子
 かく作らるる自教言と云り微瀉の嘆は
 日急ぐればあるをいふ秋情を梨花小
 花と云へり。恙ぬが色欲の悔どひをみづ
 かしいまめらむと云ふもいふも朱子
 けはれぬまのづらひのりる。漢書
 節義秦檜の威をねらふとて梨瀉小
 樽るにふあらず。悔と云ふ。鉄作心肝也。彭
 越とあるとげゆいあり。項羽と云ふ。祖
 考をけく勇心。虞姬戚夫人小若と云
 かんみごを流し。周郎と云ふ。赤辭と云ふ。孟徳と
 云ふ。つら。小喬小梅と云ふ。とある。は
 まして況やそか人。莊と云ふ。色欲を
 断んや。朱子のつら。いまめらむと
 悔と云ふ。大賢と云ふ。つら。と云ふ。

三

第...

かりのやとつ
人言せしすすす
稀しと一世の事

如し無しと
解しと空同し
此は又ツギくし
く作ち又とに廿五
にハキートト
後言ふ竹梅
救す
なれりあ
全道恒之スキん
恒

せしや
如のサマ
そしと不事
アトト
限りア身
おま

家名のつてくくあはるる

るせやむらさおとに奥あつ物あな

ま一人乃れむやに位あしりあさけり

くらの月の交へし

ぐりあむりあむりあむりあむり

物あつてなむらさおとに奥あつ物あな

ゆよあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

に月しよみくち我しよみくちばあそ
け限をかんぐし

いぬめくくきくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
きらあわ

本ぐら物わつてげいさあぬ庭草
わぐもぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

自然の神あり。陶淵明が時を待たず
新といひ又本修く以向榮といひ周茂
州が密着をよしうくくくくくくくく
思と一般ありとくくくくくくくく

このこ 羨子と書

まといへ すいりさあわ。秀垣とく

てうせ 調度とりまわ。志保ひけ

れやうがら物をいふと云人あはれも只

一切のまじりものた具をいふらうし。

高亭れ者府しそ。中編要畧抄をこ

作わーに。調度懸一人二人若干

人どあわぐれを持てあわくむらひ

を云とらんくくく

たほくれぬくらのんははくして家を
舉業よ作まはるを云

唐れ日本乃 唐物日本物乃多

乃器を云

前裁のるのまもぞんはものるるど

枝をたぬ葉をしとくわがとほく

ろいそそいそ好みわ

ながくはづま又叶のあれくわわ

もあわねん

白樂天履道居詩

莫嫌地窄林亭小。莫道家貧活計微。

多少朱明鎮空宅。主人到不終歸。

吳崑廢宅詩。不獨凄凉眼前事。咸陽

一火便成原。

おほくの家おほくを

家を作らば式校の居家必用と云わよ

んくら。雅尚齋の燕閑之道生ハ残よ

乃をくわ。そ人よおほくしよまの家たに

てぞとよ好じあああへ。ま秋

相宮は楹の母あわ。心て我言とよ

いものめ。福詠。職文伸が茶をし

我又前ノ同じと云ふは、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

は、心ヲサカカコソアテ...

周翰の人の詩をくくつてと臣詔とくく付
ふ千巻とくくし本を善くむるにをくくお長
と号は日本とてむくくくく後とくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

白氏文集 唐の白樂天の集也。わくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

白氏長慶集とくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

五巻とくく白氏文集とくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

衣のわ。書籍をくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく

事わて菅笠相乃詩をくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく

事といひくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく

詠歌大概も白氏文集才一才二れ性
くくくくくくくくくくくくくくく

老子姓とくく李右の耳字偃陽又老聃
くくくくくくくくくくくくくくく

史とくく周を去て西小ゆく時函谷関
くくくくくくくくくくくくくくく

て突令其喜小おと五千言をくく
くくくくくくくくくくくくくくく

續く今これ老子終是事わ八十一章
くくくくくくくくくくくくくくく

漢代河上公^{タカ}を祀し又ハ道德經^{タカ}も

名づく宋^{ソウ}の末ハ林希逸^{キイ}の義あり

南華^{ナン}の篇^{ヘン} 莊周^{シュウ}字^ジ子休^{キウ}宋^{ソウ}人也^ニ 隱遁^{イン}志^シ

て書を著^{シテ}し皆^ハ老子^{ラウ}子^シ道德^{タク}の意^イよりし

クも三十三篇あり。南華^{ナン}を絶^{ツツ}てし名^ナはく

晋^{シン}の郭^{クワ}象^{シヤウ}を注^{チュウ}し。唐^{テイ}の玄^{ゲン}英^{エイ}の疏^{シュ}あり。

宋^{ソウ}ハ林希逸^{キイ}の口義^{コウギ}あり。莊子^{シュウ}の文章^{ブツブツ}ハ古今

乃^{ナラ}奇筆^{キヒツ}あり。老子^{ラウ}子^シ 莊子^{シュウ}も史記^{シキ}の傳^{デン}あり。

世^セ國^{クニ}ハ博^{ハク}學^{ガク}とぞし。博^{ハク}學^{ガク}子^シ 得業^{トクゲツ}ハ人也^ニ。

前^{ゼン}位^イ令^{レイ}ハ紀傳^{キデン}明^{メイ}經^{キョウ}明^{メイ}法^{ホウ}筆^{ヒツ}道^{ダウ}ハ四^シの部^ブ右^ウ博^{ハク}

士^シを考^{カウ}してあり。日本^{ニッポン}ハ博^{ハク}士^シとぞし。

と懐風藻^{クワイフソウ}一^{イツ}巻^{マク}。經國集^{キョウコクシツ}ハ本朝^{ホンテウ}文粹^{ブンツイ}

十四^{シヨウ}巻^{マク}。續本朝^{コトクホンテウ}文粹^{ブンツイ}十四^{シヨウ}巻^{マク}。文華^{ブンカ}秀^{シュウ}藻^{ソウ}

集^{シツ}三^{サン}巻^{マク}。無題^{ムテイ}詩^シ十二^{ジュニ}巻^{マク}。類^{ルイ}多^タし。又^{マタ}一^{イツ}巻^{マク}

めてハ野^ノ相^{サウ}公^{コウ}集^{シツ}菅^{カン}家^ケ文^{ブン}草^{ソウ}善^{ゼン}相^{サウ}公^{コウ}集^{シツ}。

都^ト氏^シハ文集^{ブンシツ}江^{カウ}吏^リ部^ブ集^{シツ}橋^{キョウ}在^{ザイ}列^{レツ}集^{シツ}源^{ゲン}順^{ジュン}集^{シツ}が

どの部^ブなり。

世^セ一^{イツ}本^{ポン}ハ又^{マタ}ハ文選^{ブンセン}老子^{ラウ}子^シハ福^{フク}とありて。

あつた。白^{ハク}氏^シハ集^{シツ}とありて。

うらやまおぼゆる。

本の葉より残る松之峯にまじりて
 家長 後鳥羽院代時の人也。新古今
 源家も和名所無園にみえはげめてま
 かり日幾侍し。藤塩草かくともは
 きし君代に教へて讀をくわむ。浦波
 家長ハ高明公の十代の孫也。右馬助前但馬守。
 ありたるのこころはよろこぶ。ハ雲あり
 吾れが友にまじりてわがわがまを
 きりける斗。末代も終つてまじりて
 つよとてあり

いさや 不知とあり。いかにいかにいかに
 をいさよとてあり
 秋枕 源氏玉つらにまじりてのさるまじり
 とあり。花よりまじりてのさるまじり
 とあり。能因法師が五代集にまじりあり
 あり。その詞のつらまじりてのさるまじり
 梁塵秘抄。はまじりてのさるまじり
 馬樂に類をまじりてのさるまじり
 敵乃にあり。杜佑通典万軍五言。後有虞公。
 義教能合。梁上。義教。

博物志云八云。夫音節者。其於音也。若草木之有節。過行雲。謂其友曰。昔韓娥東之村。過雍門。鬻歌。飯食而去。歸。得音。遠。累。三日。不絕。故雍門人至今善歌。笑效娥之遺聲也。

けり事。母。わ。ぐ。い。の。は。梁。塵。と。い。ふ。也。

郢曲。元。衡。梅。詩。郢。曲。琴。空。奏。灑。奎。律。終。

一。載。たり。久。遠。宋。玉。楚。玉。問。宥。有。歌。於。

郢。中。者。其。始。曰。个。里。巴。人。因。中。屬。而。和。者。數。千。人。言。

為。陽。阿。雍。宮。因。中。屬。而。和。者。數。百。人。言。為。陽。

音。曲。因。中。屬。而。和。者。數。十。人。引。周。刻。刑。雜。

以。流。徵。因。中。屬。而。和。者。不。過。數。人。而。已。是。其。曲。也。言。

而。和。者。多。郢。楚。國。都。也。亦。徒。在。於。楚。國。也。言。曲。也。言。

二。也。云。一。言。種。と。也。

け。候。と。前。候。と。合。て。て。て。ん。ん。と。い。う。べ。

一。文。章。詩。賦。和。歌。郢。曲。此。事。を。い。中。

い。め。へ。を。ま。つ。い。て。今。を。後。を。わ。こ。ね。世。の。人。

と。い。い。い。い。の。い。あ。れ。な。り。と。い。い。い。い。い。い。い。

と。と。い。い。も。う。と。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。

人。と。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。

い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。

乃といひむしーの人をいひてづぐ
し。昔をあらがれてとらふと評福と
ぶあわ

第十五

いづくもあれどう様いらいらとめさしらん
目玉ヌタルカクハツキリトエルニ

ちとほのわらわちかかこいありよはわあうい
思ふ事キタセト心得マキナリ

いらは山里をどらうめあれぬ事のぞめかう
田舎メキタナリ

お恭へうわあめて又入るぞ事この事。
田舎メキタナリ

候はよわらるるごいひらこそ様いされ
田舎メキタナリ

さわかに旅宿すミニテコソ
田舎メキタナリ

手先満る自由し神ホトニ達セホト去旅とてい入重宝ニ
田舎メキタナリ

なともあびていひあういあうい
田舎メキタナリ

此段モ前段心交
無一ノヲ數トモ其
ヨリ下ノツケケ
必死ヲおもスに如也
聲有ト云頭ニ

いめ子侍をこころざししすまゝ。いひまゝ。いひまゝ。
濁富の清貧ヒシもさふらば事なまゝとれども
やちふら大のれはる漁ぐハ賤の終ヲカり也。
塵外チンガ遊カキヨ筆ヒシ賤をあげて古今コノけら世ヨまゝ
りて。エ下をあらんじ。或ハ俗ガクをあげて
貧賤ヒシをあらるふの二百餘人を乃せ
くわいみと好くはるあゝも。

此註流手校草子ノヲモカゲヲウツシテ四季ノ詞ヲ言結んんこ

四季
第十九

空の名残
第九

柳ユズ花乃ハナうらりこころよのづかにあされ
なれも四季あられ秋アキと梅ウメと人ヒトづも
いあれど。うれし物モノと。此コノも人ヒトづも
うまらうあられも。さあそあめれ。
空ソラの影カゲも。事コトれか。春ハルの影カゲも。
やうらり日ヒ影カゲも。か。さ。ま。ら。え。い。は。ら。る。影カゲ
しり。影カゲも。さ。ま。ら。え。い。は。ら。る。影カゲ
事コトれか。さ。ま。ら。え。い。は。ら。る。影カゲ
ら。ら。さ。ま。ら。え。い。は。ら。る。影カゲ
さ。ま。ら。え。い。は。ら。る。影カゲ

葉もてまじりつらわがば比都よるまじりては

口のひよひがほしう事とてまじりては

まじりてはかくて明ゆくをたすも多岐のよ

かひち天地ノ氣要之ハハノ氣ヲ又替シテハ改リテハ年毎ニ更ニたしむるは

ちぞすん格中ノ三ノた路れは梅松きわして花やみ

貴財サツキキ貴財サツキキまじりてはまじりては

おとくのぶつわたり 丹後兼ねづら松

よのよ原氏物類は似らぬうよしとて

半平カバくぐりはは紫二女の形管よお

ぬんや原氏約事うらりわは十二ヶ月

は感哀を志すわ

ものあられあやうこそまされ

拾遺拾遺まはたつ花のひくは咲斗物れは秋

そほきれぬ 原氏まは秋のあらしひよ昔

ら秋とんオホム子人なほまじりわらわ

白樂天詩オホム子大底四時心松若就本

晴新オホム子は秋天

ふしうまじりてはまじりては

東坡オホム子書史人油陰堂オホム子にてまじりては

を改オホム子ひまは月秋月は梅きわらわ

此段春より云
登し木又春
立袖に外尋
常ふらぶ知
此の是一段
常山ノ蛇ノ
有尾相クヲト
臣セラレシハモリ

遊ユウ德トク麟リンの候コト録ロクよんてぬり月ツキよんてぬり
新ニホよんてぬりわと云人あり海ウミ一ヒト花ハナを
けい語コトも喜ヨシしあふをわ

鳥トリ乃ノ勢セウがもも 陳チン陶トウ南ナン 野ノ花ハナ啼ナリ鳥トリ一ヒト般パン云

こい侍シ待マ中チュウもつり又東坡トウポの侍シ母ハハ春山チュンサン磔カクし

鳴ナリ春チュン禽イン世セ間カン不フ可カ無ム我ガ吟イン

乃ノもやうヤウ形ケイの目メ彩サイ ちチ来ライとあわ

東坡トウポ内ナイ制セイ集シツ五ゴ云ユン仙家センカ日月ニツゲツ本ホン七シチ宗ソウ

送ソウ臘ラツ逐ツク去キョ空クウ亦ヤク終シュウ 杜子美トシメの詩シよヨ送ソウ

日ニチ山サン麓ロク草ソウ香カウとあわ

やヤ去キョうウく やヤうウく 去キョうウく 去キョうウく

二月ニゲツれレ後ゴをヲいふ

ちチあアまマだダわワらラまマるル葉エフ ちチあアまマるルがガ初ハツメめメ

雨アメ前マヘ初ハツメ見ミ花ハナ香カウ葉エフ 雨アメはハ兼カミしシ無ム紫シ庭テイ云ユン

只ただ心をココロ乃ノもぞがガやヤまマのノ 只ただ荆コウ花カウをヲまマるル

恨ウレシ人ヒト眠ネム 恨ウレシといトいイはハにニうウくク

ちチあアまマるルがガ初ハツメめメとトあアまマるル ちチあアまマるルがガ初ハツメめメ

之コノころノ也ナリ 未いま今いまににぞぞ存ゾン侍シ花ハナ橋ハシはハあアをヲか

げげしし昔ムカシの人ヒト乃ノ神カミけけりりとといいははるる

ななげげ梅ウメのノにニああひひ 花ハナ橋ハシはハ昔ムカシととああままるる

と何事あるれ母を梅の匂いも昔はあ
さま也。 毒花あふも昔にそおれし

みのまはりのほろよ

梅はらひいじしこいさう思ふ事しゆ

色このとれ家らりつと梅の花乃さうり母。

去年をこして西對へつとてい至中將也。

罪浮れ梅花の本めて淡粧素服れ人と。

酒ももきし趙師権あふとや。り又

母をいさごほつものもいさごはら花を

いほりて馬をむぐの羊教之善厚謙が懐

にあふとや。り又詩人の家より母を

前村れ一枝園林の守樹とぞ雷の時に昔ぞ

たらしげらん

山吹乃まじりさふ

澄佛れろ 是より夏れとていさ

灌佛の四月八月はたれつたけい佛生會

と。推古天白きよりけり。釋迦めま乃。

俱毘藍城しと。生れ給ひとら時五誌下

て水まろくまて 秋尊にわらせたりと云
あり。公事根源より見しなり

薄生八歳第三に 去抵経日二月初八日乃

佛生り也 因建子以子月為歲之始 是以土月

為之月也 社主九年四月初八日 釋迦生也 子

至卯月是也 二月八日 為佛生辰也

疑之不知者 不考以年之建之 移以四月

為年之始 何所誤歟

祭にあり 賀茂の祭を云也 賀茂乃國

祭に 四月中に申日おこりしを賀茂志

中祭なりし 賀茂祭に申日おこりし

所人ありしなりしを賀茂祭なりし也 前日

賀茂松尾に社司にありしを賀茂祭なりし也

に祭あり 欽明天皇より始 所又申日 関白

に賀茂詣と云事あり 皆公事根源より見

えしなり

賀茂に楢原に 白樂天詩録

樹陰前 逐晚涼

五月あめつこ 天保十九年五月

に 耕ありて 百良 諸人 尊 蒲 瀧

あやうきさきさき夕ふれ
源氏夕鳥也
かの白くさげりをるん夕鳥と申傳ふ
花の名も人めはてがうあうき垣抄
咲傳らとら

夕鳥巻よ住傳ら人夕ふの花とが
れあにもはらわらうこと昔七山人
思われはるこれあうこの昔よあうこと昔
まうらうと悦びて其書をくしむらん世
中此人の書をえてもし一冊書をよむ
もの額のうちにけらん字をよむらん

くしむ我もきたにこそあれと心口を
くしむおしほひくうづつう忘傳らん杜
子義が除架れ頭はも勢架あわとあわ
其詩も云。東女形己度とある葉轉る葉
殊幸結白花。寧解青夢除秋中聲
石多孝雀意何必実事と申後人生亦有初
杜が集ハ人の家もあれとて此人のく
讀てあうものもねば時り人秋巻れあ
云葉とて書やれし
蚊刺火大とて蚊刺は宿るす

公事根漁よ云大後は六月晦日首寢は
を糸雀門よあつまらて後をとり也。六月十
二月。こらびあわ。天武天皇は此時より始り
又しこの家に輪をこゆりあり。みま月
はら載のしこころ人か歳はめらたを
いあひ教を習はしと中侍は侍らまらる。ま
は性も実白は記は思ふ事なるつよは福とて
あまのいほまらわはまらてしこころはらるま
けあを詠る也とらんきり

延喜式申す。六月晦日大後れ祝詞よの
よ。今ト言のこゑは。中長後と
よ。木同のて。首末の言は。小異也。六月。閏月
あも。後河内かこらるんやと。いふ。はは。六月
よ。ま。し。と。い。ふ。と。東鑑よ。らん。き。り
セツル。是より杖のよ。い。ふ。也
公事根源云。七月七日。是夜。たこらる。王平
博。室。七。年。より。始。り。乞。巧。奠。も。七。夕
祭。も。云。也。今。夕。ハ。牽。牛。織。女。の。逢。夜
な。れ。鳥。鵲。も。河。よ。さ。し。て。翼。を。の。け
橋。を。り。て。織。女。を。わ。り。す。と。淮南子。続

きりかへを人として。たがふあるまじき海。きりかへす
れ月あやもあつらぬといひりぞあつれを
とらぬ

佛名 十二月十九日。らむが一日まて。こ
この日あり。或は一夜を例あらば。佛名とて。こ
之世の法佛。れ名号を唱て。六根の衆を滅
し。らん也。滅し佛名。絶ふらう。これ功德を
らうらう。まじきあや。室龜五年十二月。らむと始つ。
承和の比。毎年佛名。三今日。けらる。法國よ
て殺生禁断のより。格ふらう。らむ。あつれ公
事根源小載。らむ

元亨釈書九。秋。静安。後西大寺。常勝。學法相。尊
居比良山。護十二佛名。經。禮拜。修懺。其声。聞。帝。制。
諸州。間有。聞者。因茲。勅。賜。僧官。美和。五年。奏。置。
官。早。季。冬。佛名。懺。

荷前 十二月吉日を撰ふ。先十三日。ふらう
こつ。こつ。をう。孫。て。さ。さ。さ。さ。内使。ハ。公。卿。の。も。願。と
人のもあらる。あつら。と。十陵。ハ。墓。ふ。年。れ。終。り
小幣。白。巾。を。ち。り。せ。終。り。也。先。十。陵。の。弟。終。り。

ん也鬼ハラカシとハ方ハ神カミ氏ノれハ也ハ四ヨ目メありキ也
 うハげハさハらハ面オモをシさシるハ手テにテ楯タテ矛コをシらシ又マ俵ハコ子コ
 とシてシ女メ人ノ紃ヒれシ布フ衣キ着キらシのハをシ卒シてシ内ウチ裏ウラ
 けハ四ヨ門カドをシめシりシ也ハ慶ウレシ雲クモ二ニ年ニ十ジュウ二ニ月ゲツよハ初ハジメまリり
 けハ年ネン天アメ下ノ小コ百ヒャク姓セイ多クくハ疫エキ癘レキ小コ憊ヘイされシけリ
 一ヒトゆユありキ也ハ案アヒじシらシふハ催ヒハハ夜ヨをシたシいシ
 ぬシよシとシ也ハ戲ウケれシやシまシれシぬシあシくシれシ礼レイとシ也
 周シュウ禮レイ記キ論ロン語ゴにシのハせシらシるハれシらシはシせシ
 此コノ禮レイ儀ギ志シもシらシるハとシてシ事コトをシらシるハ殊コト更ニ文モン
 選センりシ乃ハ皆ハらシらシ張チヤウ衡ヘイとシ東トウ京キヤウ賦ヒ小コ祥シヤウありキ
 其コノ辭ジ曰クハ卒ソツ歲サイ大ダイ難ナン也ハ驅ク除シヨ羊ヤウ藩ハン方フ相シヤウ秉メイ鉞ゼン巫ウ覲ジ採サイ芻シュ
 辰チン子シ萬マン童トウ丹タン首シュ玄ヘン馬バ桃トウ弧コ棘キヤク矢シヤ所シヨ以ヨリ致シ無ム巢サウ飛ヒ磯イ
 雨ウ散サン剛コウ癘レキ必ヒツ散サン也ハ煌クワウ火カ馳チ而シ星セイ流リウ逐シク赤セキ疫エキ於オ四シ高カウ然ニ
 後コノ凌レイ天テン也ハ絶ケツ飛ヒ也ハ捐ケン焉ヤン魅メイ斯シ橋キヤウ狂キヤウ斬セン蛟キヤウ蛇ゼ腦ノウ方フ良リヤウ
 因イン耕コウ父フ於オ清セイ冷レイ溺ニョク女メ魅メイ於オ神シン潢クワウ殘ザン疫エキ與ヨリ周シュウ象シヤウ瘴シヤウ
 野ノ仲チュウ而シ穢タイ存ソン光クワウ公コウ盡ジン為シ之ノ震シン懼ク况キヤウ魅メイ或ウチ虫チュウ與ヨリ畢ヒ方フ
 度タク朔シヨク作サク梗キヤウ守シュ以ヨリ柵シヤク爵キヤク壘レイ神シン荼タ副フ焉ヤン對タイ採サイ索ソク葦シ葦シ目メ察サツ
 區ク稱ケウ同トウ執シツ遺イ鬼キ京キヤウ至シ密ミツ清セイ罔クワウ有ユ不フ是シ也ハ又マタ後コノ
 漢カン志シ才サイ五ゴにシありキ也ハ

陸奥上卷二

四

四方神 公事根源云元正此宙の時天

皇屬星をこるへ天地四方山陵を拜はて

年災をこらし家祚を祈りこころ儀し

竹やげ事いじ始つともんふと仁和寺

正月寅刻よ天地四方属星山陵を

終ふ中宇多帝此法記よあれど濫觴と

んふと又皇極天皇雨を祈終ふと

河上には幸ありて四方をあり終ひされど

雨は日まぐらちちり中日本紀よ載されは

ふれなごを始ともんふと属星を拜

して災難を除く類々天地瑞祥志といふ

あもんくち

目をやるゆふいさつくありく義あり

ほ氏あつひのまゝあをやあこれし

まぐらひぬ

なれ人の心もあつてまゝつる 曾祿好忠

祿玉うつまはれおちりにあふちり

はゆわあらんしとせ。世を捨違ふ

たまはる魂を。鎮魂とせ玉を

本

のゆゑに昔より年々此の地を
して又まゝにさうりつらつと
候れ致端も打されつらつと
くお怒りさうをんなあつて
れを法し吳るは是を常山蛇の首尾
相救ふといふ又は候れと
枕のまじり例をひくそ
まゝぬ業法あり

大略のこゝに松く

巨匠將来ふりつらつと
民将來ををが
目をさう
せうでれさう
野らる松を
が籃籃内傳ふ

け候四季は
形容業に
貫之梅を
紅梅を

絶^スど^クの^ハ志^スも^ハか^ノ水^ノあ^ラず^ト鴨^ノも^ハ
が^ハい^タん^ハ洞^ノも^ハあ^ラず^トそれ^ト書^キ夜^ヲを^シそ^ノ
ぞ^ハ光^ク彩^ヲを^シい^ハそ^ノう^チり^ハけ^ルん



